

氏名(本籍)	影山 尚之 (兵庫県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博論第137号		
学位授与年月日	平成18年12月21日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 人間文化研究科		
論文題目	万葉和歌の表現空間		
論文審査委員	(委員長) 教授 坂本 信幸	教授 奥村 悦三	
	教授 松尾 良樹	教授 毛利 正守	
		(大阪市立大学大学院文学研究科)	

論文内容の要旨

本論文は、万葉の歌のことばの表現性と、万葉和歌の表現空間を究明したものである。

まず、「序論 和歌の表現空間」において、本論文で頻用する術語「表現性」および「表現空間」についての、論者の定義を施している。すなわち、和歌のことばが備えるさまざまな「含み」と「広がり」とを「表現性」と呼び、一首の和歌もしくは複数の和歌群がもたらすイメージの世界を「表現空間」と呼ぶのである。序論ではその用語によって主に万葉集の贈答歌のありかたについて説明を試み、論者が設定する観点を明確にし、全体の導言としている。

第一章は「贈答歌と宴席詠の表現空間」と題し、七編の論文からなる。その前半部は贈答歌を考察対象とし、贈答歌における選語意識や応答の呼吸、贈り手と受け手との間に成り立つコミュニケーションの動態について考えている。第一論では、聖武天皇と海上女王の贈答を、第二論から第四論までは大伴家持と坂上大嬢による贈答を取り上げている。第一論は、解釈に諸説のある二首について、先行研究を検討した上で問題点を明確にし、両者の贈答が擲諭と皮肉を前面に押し立てた諧謔を強く含む内容であることを解明している。第二論は、家持と大嬢の初期相聞贈答について、大嬢歌の欠陥を覆うように仕立てる家持歌の意図について論じたものである。第三、四論は、和歌に習熟しているとは言い難い大嬢に対して、家持が相聞長歌を贈ることの意図と配慮を表現に即して考えている。

後半部第五論から第八論は、宴席詠を考察対象としたものである。贈答と宴席を一括りにする理由について、論者はそこに成り立つ表現空間(歌の呼吸、歌が他者に及ぼす作用)が近似すると考えるからだとする。第五論は、大伴池主宅宴席において、新作された大原今城の歌二首と誦詠古歌四首と

が、ともに聖武天皇追慕の心情を主題とすることを明らかにし、その契機を推考するにあたって「初雪」の語に着目、万葉集中に孤例である「初雪」の語を今城が選択するに至る筋道について考究している。第六論は、三形王宅宴席で披露される古歌が座を構成する一同に懐旧の情を誘発する機能を果たしたのでないかと論じている。第七論は、越中における宴席詠で、誦詠される古歌と当日の創作歌とが宴の進行の中でいかなる役割を果たしているか、という点について考察している。

第二章は、「和歌の編集」と題し、六編の論からなる。ひとつひとつの歌が歌集に組み入れられるに際しては、程度の大小はあれ、必ず編集（取捨選択、配列、題詞・左注等の付加など）の過程を経るのであり、その作業を通して和歌の表現空間が確立定位すると論者は考えており、「編纂」を問うのではなく、あくまで「編集」の次元で考察しようとするのである。第一論・第二論は、巻十六所収の和歌説話を考察対象とし、第一論では「恋夫君歌」の長反歌および或本反歌と、左注に展開される説話とが有機的にいかに関連しているかについて考察している。第二論は、椎野長年による歌の改変をモチーフとした説話の戯笑性の本質を解明したものである。「橘の寺の長屋に」歌が、巻二所収三方沙弥歌を基にした替え歌であることを明らかにし、そこに成り立つ哄笑をそぎ落としてしまったところに成り立つ屈折した笑いを、本説話のポイントに置いて読むべきことを主張している。第三論は、錯綜した作品外形を持つ石田王挽歌について、「或本反歌」と表示される二首の短歌が、冒頭の長歌に対する反歌であることを論証するものである。そのような観点を設定することで、問題の多いこの作品についての解明の糸口を開いたものである。

第四論および第五論は、高市黒人作歌を対象に据え論じており、第四論では黒人歌と伝えられる全作品群に対して、実作と認められるものと「伝黒人歌」として慎重に扱うべき作品群とを峻別すべきことを提起し、それぞれの問題点を整理している。また、第五論では「羈旅歌八首」について、その配列原理が地名に求められることを再確認したものである。章末には「補論」として、「斉明四年十月紀伊国行幸と和歌」と題する稿を置き、同行幸時に製作された歌謡・和歌と、それに付随する初期万葉の諸問題を総括的に論じている。「編集」を切り口とする緒論のなかではやや観点を異にするために「補論」としているが、そこで用いる表現分析の手法はそれまでの諸論と共通しており、中皇命作歌三首が何らかの編集処置を経て伝来していると見通されるところからも関連性のある論といえるものである。

第三章は、「歌ことばの表現性」として三編の論を配した。「序論」冒頭に説くところの、歌のことばのもつ表現性を用例に則して分析しようとしたものである。その際、万葉集和歌の考察に重点を絞りつつも、平安和歌への展開を視野に収めるよう意識されている。第一論は、「暑し」「涼し」「寒し」など温度形容詞の用例傾向を分析し、「寒し」が歌語化を遂げていることを跡づけている。第二論は、「奥山」「高山」両語の意味領域がいかに分担されているかを検証し、類似する文脈内で用いられる用例について、そこにはたらく選語意識を考察したものである。最後の第三論は「秋の田の」と「秋田

刈る」が、万葉集と平安和歌とで使用傾向を顕著に変える現象について、百人一首天智天皇歌（すなわち後撰集歌）を契機として考察したものである。

論文審査の結果の要旨

日常の言語とは違って、それ自体にさまざまな含みや広がりのある和歌のことばが、ひと続きの文脈として和歌を形成し、一つ一つのことばの含みが複雑に作用しあい彫りの深い言語世界を創り出してゆく。論者はそれを「表現空間」と呼称するが、本論は、万葉歌のことばの表現性と、万葉和歌におけるその表現空間の具体相について論究したものである。

まず、論者は「序論和歌の表現空間」において、本論文中で頻用する術語「表現性」および「表現空間」につき、論者による定義を施している。すなわち、和歌のことばが備えるさまざまな「含み」と「広がり」とを「表現性」と呼び、一首の和歌もしくは複数の和歌群がもたらすイメージの世界を「表現空間」と呼ぶ。序論ではその用語によって主に万葉集の贈答歌のありかたについて説明を試み、編者が設定する観点を明確にして、もって全体の導言としている。以下の各論は必ずしもすべてこの術語を用いる化けではないが、それぞれの分析対象に即して、歌のことばの表現性と和歌の表現空間を究明しようとする本論文の目標を明確に述べたものである。

第一章は「贈答歌と宴席詠の表現空間」と題し、七編の論文からなっている。その前半部は贈答歌を考察対象とし、贈答歌における選語意識や応答の呼吸、贈り手と受け手との間に成り立つコミュニケーションの動態について考えたもので、第一論では聖武天皇と海上女王の贈答を、第二論から第四論までは大伴家持と坂上大嬢による贈答を取り上げている。第一論は、解釈に諸説のある二首について先行研究を検討した上で、問題点を明確にし、両者の贈答が椰櫨と皮肉を前面に押し立てた諧謔を強く含む内容であることを解明したもので、万葉研究において最も権威ある萬葉学会の審査を経て、その機関誌『萬葉』第160号に掲載された論であり、学会の支持を得た好論である。第二論は、大伴家持と坂上大嬢の初期相聞贈答について、大嬢歌の欠陥を覆うように仕立てる家持歌の意図を明らかにした論であり、つづく第三、四論もそれに関係している。およそ和歌に習熟しているとは言い難い大嬢に対して、家持が相聞長歌を贈ることの意味を追求し、そこに張り巡らされた意図と配慮を表現に即して立体的に把握しようとする一連の論考として意義がある。

後半部第五論から第八論は宴席詠を考察対象とする。贈答と宴席を一括りにする理由は、そこに減り立つ表現空間（歌の呼吸、歌が他者に及ぼす作用）が近似すると考えることによる。第五論は大伴池宅宴席において、新作された大原今城の歌二首と誦詠古歌四首とがともに聖武天皇追慕の心情を主題とすることを明らかにした論である。その契機を推考するにあたり「初雪」の語に着目、万葉集中に孤例である「初雪」の語を今城が選択するに至る筋道を説いて論理的である。集中孤例である四四七六歌の「しきみが花」に注目すると、さらに説得力を増すと判断される。上代文学会の審査を経

て機関誌『上代文学』第71号に掲載され、雑誌『国文学』1994年3月号の「学界時評」に採り上げられた注目すべき論である。第六論は三形王宅宴席で披露された古歌が、座を構成する一同に懐旧の情を誘発する機能を果たしたと推定する。第七論は越中における宴席詠において、誦詠される古歌と当日の創作歌とが宴の進行の中でいかなる役割を果たしているかという点について考察した論で、第五・六論と同様に宴席に披露される古歌の機能を探った論である。宴席歌としての機能についてさらなる考察が望まれるが、雑誌『国文学』2003年9月号の「学会時評」採択された好論である。

第二章は「和歌の編集」と題し、六編の論から成っている。ひとつひとつの歌が歌集に組み入れられるに際しては、程度の大小はあれ、必ず編集（取捨選択、配列、題詞・左注等の付加など）の過程を経るのであり、その作業を通して和歌の表現空間が確立定位するという論者の考えは、納得のいくものといえる。第一論は、巻十六・三八一～三八三歌「恋夫君歌」の形成過程について、従来とは異なる視点を提示した論であり、左注漢文の説話と和歌との接合面を詳細に読み解き、作品配列や題詞の意匠に説き及ぶもので、学会機関誌『萬葉』184号に掲載された論であり、説得力をもつ。第二論は、やはり審査のある古代国文学関係学術誌『美夫君志』61号に掲載された論であり、巻十六・三八二二歌がもと巻二・一二三～一二五歌三方沙弥関係歌の享受過程でいわば替え歌として定位したものであると説き、それをさらに改作したという三八二三歌がどのような笑いを齎すか、という点を明確に論じたものである。「橘」と「山橘」の相違など、なお問題にすべき点はあるものの、雑誌『国文学』2001年3月号「学会時評」に取り上げられ「とてもおもしろかった」との評（時評者青木周平氏）を得た論である。第三論は、石田王挽歌について、「或本反歌」と表示される二首の短歌が、冒頭の長歌に対する反歌であることを論証するものである。問題の多いこの作品についての一つの理解の方法として意義はあるものの、十分説得力を持つ論とはいえない。第四論および第五論は高市黒人作歌についての論である。第四論では、集中の黒人歌と伝えられる作品に対して、実作と認められるものと「伝黒人歌」として扱うべき作品群とを慎重に区別して扱うべきであるとして、それぞれの問題点を整理したもので、類歌関係の整理にはやや問題のあるものの納得できるものである。第五論は、黒人の「羈旅歌八首」の配列原理が地名に求められるとする論であるが、二七三歌の「近江の海」の語についての言及の不備や、例外を二つも含む点に問題が残ろう。章末の「補論 斉明四年十月紀伊国行幸と和歌」は、「編集」を切り口とする諸論のなかではやや観点を異にするために「補論」としているが、そこで用いている表現分析の手法はそれまでの緒論と共通するものである。斉明天皇四年十月の紀伊国行幸時に製作された歌謡・和歌と、それに付随する初期万葉の諸問題を総括的に扱った論として意義があるといえよう。なお、この論はまもなく公刊予定の『初期万葉を構想する』（上代文学会編『上代文学叢書』）に掲載されることに決定しているものである。第三章は「歌ことばの表現性」と題し、三編の論から成っている。第一論は、歌ことば「サムシ」の語性について論じたもので、「暑し」「涼し」「寒し」など温度形容詞の用例傾向を分析し、「寒し」が歌語化を遂げているこ

とを跡づけた新鮮な切り口の論である、学術雑誌『美夫君志』67号に掲載され、雑誌『国文学』2004年6月号の「学会時評」に取り上げられたている。第二論は「奥山」「高山」両語の意味領域がいかに分担されているかを検証し、類似する文脈内で用いられる用例について、そこにはたらく選語意識を考察している。第三論は、「秋の田の」と「秋田刈る」が万葉集と平安和歌とで使用傾向を顕著に変える現象について、百人一首天智天皇歌を契機として考察したものであり、万葉語研究の新しい視点を提示した論と言える。

論者は学会の将来を背負う中堅として活躍中の研究者であり、本論の中核をなす諸論文は、古代国文学関係の三大学会である「萬葉学会」「上代文学会」「美夫君志会」などの厳正な審査を経た論文である。これまでの研究実績を評価され、すでに美夫君志会理事、萬葉学会編集委員の重責を任されている研究者であり、本論の内容も高く評価できる論である。外部審査委員として萬葉学会代表の大阪市立大学大学院教授毛利正守氏も加わった厳密な審査を経た論であり、審査委員会は、論文提出者影山尚之を、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与するにふさわしい者と認めるものである。